

第1章 樹形仕立ての技術

第1節 せん定と整姿の基礎知識

よくせん定と整姿とを混同して、整姿することもせん定と呼ぶ習慣がありますが、せん定とは、ある樹木を一定の方式に従って整姿するために枝や小枝を切り取ることをいい、整姿とは乱れたり込み入った枝葉を矯正して、その樹木本来の特性を出現させる技術をいいます。

そして整姿の手段は必ずしも枝や小枝を切るだけではなく、ある枝を針金や丈夫なひもで他方に誘引したり、添え竹を枝に当てがって自分の好みに合った形に誘導したりすることもあるのです。

次に庭木のせん定をする時、毎回伸びた枝の先だけを切ることによって、木の姿を調整しようとする人が多いのですが、植物には頂芽優勢という原理があり、こういう切り方を続けますと頂部だけに枝が集中して中部以降の枝が弱ってきて、頭でっかちの樹形ができあがってしまいます。それゆえ原則として樹木をせん定する場合は、頂部の枝は強く切り、中下部から出ている枝は緩く切ることで上下のバランスを保たせることが大切です。

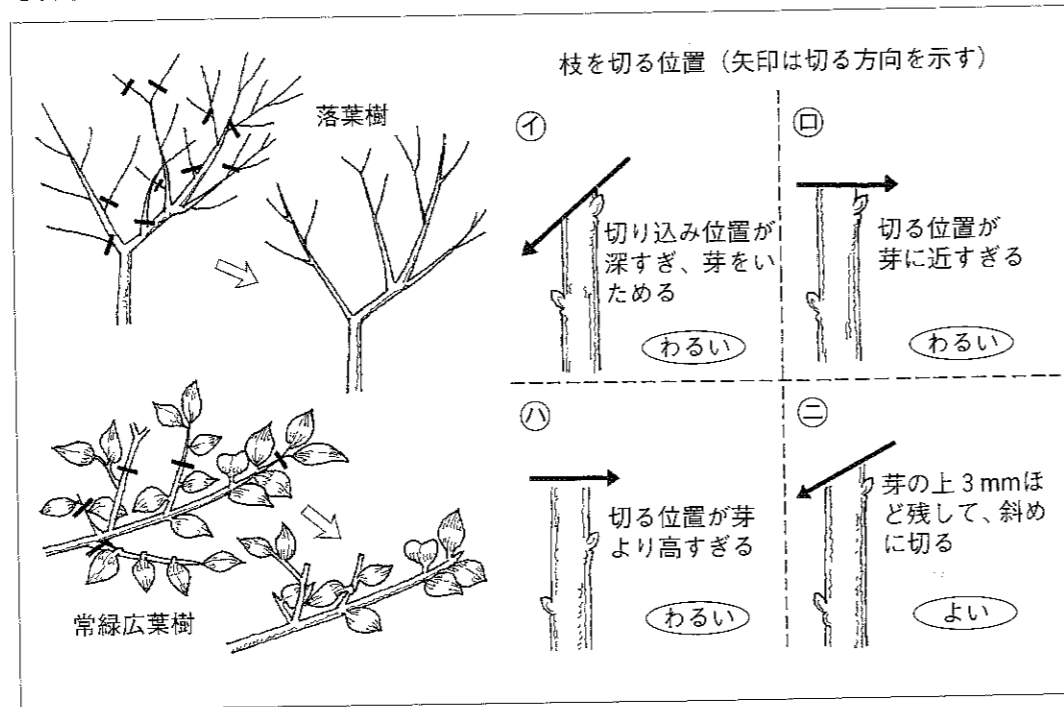
またせん定というのは枝の一部を切るだけではだめで、年数がたつて枝数の多すぎる場合や山掘りなどで気に入らない方向に伸びている枝などは、俗に「枝すかし」といって枝を切る前に間引きする必要があるものです。

特に根ぎわからそう生しやすいレンギョウ、ヤマブキ、フヨウなどは、落葉期間中に根元からの枝を前年の約半数に減らし、通風と採光を十分よくしてやるのがコツです。

イチョウ、サクラ、シラカシ、ライラック、ゲッケイジュ、キョウチクトウなどの大木にも時として根元から細いたくさんの小枝がそう生することがあります。この小枝のことを「ひこ生え」と呼び、親木には不要のもので、外観も悪いので造園上はこれらの小枝を残らず切り取ってしまいます。

これが生える原因は街路樹や不適地に植えられたサクラなどのように、根の発育に無理がかかっているような時に見られるものですから、その状態を変えなければ何べんでも再生します。

●樹木の枝の間引きと枝すかし



整姿やせん定を行うには樹種によってそれぞれに適した時期があるものです。これらの時期を失すると、花や果実を觀賞するのが目的である樹木では、全然花も実も付かないことがあります。アジサイの葉の落ちた茎を冬の間切ったため、翌年は茎だけ伸びて、ただの1花も咲かなかったという話は度々耳にすることですが、これは切り時を誤ったからです。アジサイの花芽分化初期は10月上旬ですから、切るなら遅くともそれより1カ月前の9月上旬には終わっていなければならないのです。このことについては次の時期別のせん定、整姿の項で他の例も併せて詳しく説明します。

第2節 時期別のせん定、整姿

樹木の整姿やせん定には、栽植の目的に合わせて樹形や枝振りを作るため、大枝を間引きしたり、主幹や主枝を切るなど枝物の生理にかなりの影響を与える作業もあれば、単に枯れ枝や病害虫に犯された小枝を除去したり、込みすぎた枝を間引くだけの軽い作業もあります。この後者の場合などは見つけしだいいつでも仕事ができますが、健全な幹や枝葉を切るような場合は、その後の樹木の生理状態と時期との関連によって、次のような点に留意しなければなりません。

- イ なるべく庭木を傷めない方法をとります。
- ロ せん定した傷跡の回復が早い時期に行います。
- ハ 作業がしやすい時期を選びます。
- ニ 花や果実を觀賞するのが目的で栽植しようとする場合は、前もってその樹種の花芽分化期を知っておく必要があります。

せん定の時期は大きく分けて、12～3月の休眠中に行う冬季せん定と、6～8月の生育期間中に行う夏季せん定とに大別されます。しかし庭木にはたくさんの種類がありますので、中にはこれらの中間の時季、つまり春季とか秋季とかのせん定時季もあります。

■冬季せん定

12～3月は気温が低く、休眠期間中でもありますので、樹形を作るための主枝のせん定、枝の切り戻しや間引きなどを行ってもあまり木が傷みませんし、落葉樹では葉が落ちていきますので枝の込み具合や不自然な枝振り、罹病部分や害虫に犯された箇所もよく見えて作業がしやすいものです。しかし、同じ冬季でも1月下旬から2月中旬頃までの厳寒期中は低温のため、切り口が凍ったり、弱枝は枯れ込むことがあるのでやめたほうがよいでしょう。

冬季でも暖地では12月を中心に作業ができますが、逆に寒さの厳しい地方では3～4月まで待ってからせん定をするほうが安全です。雪の多い地帯では雪の解ける頃がよく、針葉樹や落葉広葉樹類にはこの季が適しますが、常緑の広葉樹には少し寒すぎるので春以降にしたほうがよいと思います。

いっぽう、カエデ、ウメ、アンズのような春早くほう芽するものは休眠期に入ったら早めにせん定します。しかし、ウメなどはこの頃にはすでに小さいつぼみをたくさん付けていますから、切るにしても不要の枝や込んでいる小枝を間引く程度にします。反対に、サルスベリとか、ザクロなどのように芽出しの遅い樹種は、冬に切ると切り口が寒さに犯されやすいので、むしろ4月に入ってから切っても遅すぎることはありません。

■夏季せん定

6～8月に行うせん定です。この時季は植物が1年中で最も盛んな生長をする時期ですから、枝葉は密生して葉も大きくなり、徒長枝も次々と発生して形を乱しがちです。

そのため樹冠が広がって風通しが悪く、内部への日光の照射も不十分となって、台風などが来ると倒れやすくなります。それでこのシーズンでは不要の徒長枝を取り去り、込み入った枝を間引き、あるいは乱れた枝先を整理したりすることにより、樹冠内への日当たりや、風通しをよくするようにします。

せん定方法は、強い切り方で1回だけですますよりは、2～3回に分けて切るようにします。あまり強く切りますと、それだけ木が弱りますので、追肥として油かす、鶏ふん（休眠中なら化学肥料を与えてもよい）などを施すことが有効です。

夏季せん定を行うのに適する樹種としては一応どの種類も含めてよいのですが、特に常緑の広葉樹を主体としてよいでしょう。ただ前にも述べたように6～8月は花芽分化期（13ページの表参照）にせん定をしなければなりません。

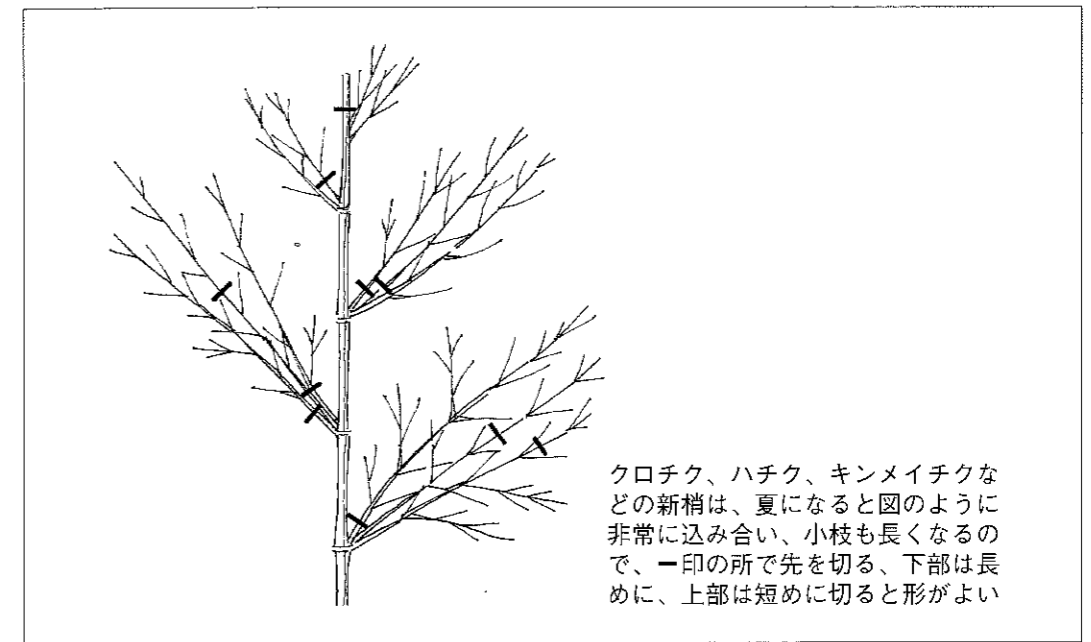
夏季せん定に向く樹木の例としてはいくらでもありますが、常緑樹ではカシ、モチ、シイ、トベラ、ツバキ、サザンカ、サンゴジュ、落葉樹ではよく徒長枝を出すタニウツギ、ユキヤナギ、ハクチョウゲ（暖地では常緑）、フジなどがそうです。

また、タケの類ではモウソウチク、キッコウチク、マダケのように大きく育てるには竹林として管理することもあります。玄関前とか、狭い庭に植えられたタケの類、例えばクロチク、マダケ、キンメイチク、ハチクのような中ぐらいのかん（稈）を持った種類は、場所や建物に応じてある高さに制限し、夏の間に長く伸びた枝を全長の1/2ないし1/3ほど切り捨て（上部は短めに、中以下は長めに）、節部からたくさん出ている小枝は1～2本に制限します。

タケの枝のせん定

クロチク、ハチク、キンメイチクなどの新梢（しょう）は、夏になると非常に込み合い、小枝も長くなるので一印の所で先を切り、下部は長めに、上部は短めに切ると形がよくなります（図のタケは本来葉が付いているが省略している）。

●タケの枝のせん定



■秋季せん定

9～11月に行うせん定で、夏季せん定の延長、もしくは冬季せん定のはしりといってもよい方法です。

したがって夏季せん定を的確にやっておけば、別に秋季せん定はしなくてもよいくらいです。この期は、切る時期は秋でも切ってから後は日一日と温度が下がり、日照時間も短くなりますので、作業としては夏にやり損なった仕事とか、土用枝の整理を9月のうちに果たし、11月に入ったら冬季せん定と同じ方式でそろそろ始めてもよいのです。

この期に適した樹種は常緑広葉樹であり、生垣用のマサキ、クチナシや寒さに強いピナカズラ、アベリア、イヌツゲなどがあります。

針葉樹のヒノキ、サワラ、カイズカイブキ、アスナロのせん定もこの期で大丈夫です。

■春季せん定

カシ、モチ、クスノキ、ユズリハ、タラヨウなどの常緑広葉樹では、4～5月になると古葉をふるって新葉と交代しますので、この頃がせん定の適期となります。同時にこの期に間引きや切り戻し、古葉のもみ上げなどを行います。

落葉の広葉樹は、生長期で枝葉がよく茂りますので、摘心、摘芽、ねん（撚）枝などを行うにもちょうどよい時期です。

ところで春早く花の咲くツバキ、ヒラドツツジ、ジンチョウゲ、やや遅く咲くフジなどは、花が咲き終わってそのままにしておくと、開花部位が上へ上へと上がって樹形を悪くします。これらは花が終わったら直ちに開花部位を切り捨て、翌年の開花に備えるようにします。